

玉川上水

JJ1SXA/池

お天気さえ良ければ、ほぼ毎日の日課で、「玉川上水」の両岸の遊歩道を歩いている、「天皇橋」の一寸下流に架かる「見影橋」、その下流の「金毘羅橋」、これは、五日市街道の砂川三番から新青梅街道に抜ける、いわゆる旧日産街道に架かる橋で、その下流に架かるのは、順番に「宮の橋」、「千手小橋・千手橋」、「清願院橋」で、これは芋窪街道に架かる橋で、西武新宿線の「玉川上水駅」のある場所だ、その下流は、「小平監視所」となり、羽村堰で取り入れた多摩川の水はここで土砂やゴミの除去が行われ、地下導水管で「東村山浄水場」へ送られている。

これより下流は清流復活区間として、多摩川の水ではなく、多摩川上流水再生センター（昭島市にある下水処理場）で処理された高度下水処理水を放流して、放流地点には「上水小橋」と呼ばれる板張りの人道橋が架けられている、北岸に、「清流の復活」の碑が建っていて、下の「上水小橋」まで下りると、真鯉や錦鯉の泳ぐ様子が見られる、また、ここは野火止用水が玉川上水から分岐する場所（取水口）でもある。

歩くコースは、その日の気分と体調で、前記の、「見影橋」から、「小平監視所」の間を適宜選んでいる、桜の季節は、良い花見の場所でもあり、四季を通じて、色々の趣がある。



小平監視所



「清流の復活」の碑



ここに清流が流れ落ち鯉が泳ぐ



「上水小橋」より下流を望む

江戸幕府の命で工事を請け負った庄右衛門、清右衛門兄弟は、工事完了後に「玉川」の性を貰い、この上水は、「玉川上水」と名付けられたのだ。

承応2年(1653年)4月4日に着工し、わずか8か月後の11月15日(この年は閏年で6月が2度あるため8か月、和暦の1年は、太陽暦の1年より11日ほど短く、3年で1か月ほど短くなり、3年に1回、1年が13か月になる)、羽村取水口から四谷大木戸までの素掘りによる水路が完成し、翌年6月には虎の門まで地下に石樋、木樋による配水管を布設し、江戸城を始め、四谷、麴町、赤坂の大地や芝、京橋方面に至る市内の南西部一帯に給水。

その後、玉川上水を導水路としてそのまま使用し、代田橋付近から淀橋浄水場までを結ぶ新水路を建設し、明治31年(1898年)年12月に近代水道は神田、日本橋方面に給水を開始したのです。

昭和40年(1965年)、武蔵水路(利根川の水を荒川に導くための導水路、利根大堰で利根川から取水され、鴻巣市で荒川に注ぎ、秋ヶ瀬取水堰から朝霞浄水場、大久保浄水場を経てそれぞれ東京都、埼玉県に上水道として供給される)が完成し、水不足解消の切札として利根川の水が東京へ導かれ、淀橋浄水場は廃止となり、その機能は東村山浄水場へと移され、そして、玉川上水の導水路としての役割も野火止用水との分岐点でもある小平監視所で終了した。

淀橋浄水場の跡は現在、西新宿の一角として賑わっているが、淀橋の地名は「ヨドバシカメラ」に名を残すのみだ。

現在の多摩川の原水の流れは、羽村取水口から取り入れられて下流500メートルの第三水門を通過すると、取水所より遠隔操作で村山貯水池と小作浄水場に送水され、残りはそのままだ玉川上水路を流れ、途中6分水(福生、熊川、拝島、立川、砂川、小平)に放流し、12キロメートル先の小平監視所に至り、沈砂池に導かれた原水は管路で「東村山浄水場」へ送られます、また、村山貯水池からは直接「東村山浄水場」へ送られます。

村山貯水池は、多摩湖の通称で呼ばれる、東大和市の狭山丘陵の溪谷に造られた1927年完成の東京都水道局水源管理事務所村山・山口貯水池管理事務所が管理する人造湖だ。



村山貯水池(多摩湖)の様子(正面若干左前方に白く見えるのは、西武ドーム)

自宅から北へ、徒歩5分弱で玉川上水の南岸に出る、遊歩道を西へ(左上流方向へ)進むと、宮の橋、金比羅橋、見影橋だ。



宮の橋



金比羅橋



見影橋

遊歩道を東へ(右下流方向へ)進むと、千手小橋(人道橋)、千手橋、清願院橋で、更に進むと、小平監視所だ、「上水小橋」まで下りて、清流の流れと、鯉が泳ぐのを眺めていると癒される。



千手小橋・千手橋



清願院橋(奥に西武新宿線の玉川上水駅舎)
芋窪街道は、この橋の手前で地下に潜り、
玉川上水・西武新宿線の線路下をくぐる



小平監視所下流の清流に泳ぐ鯉



左図場所の更に下流で泳ぐ鯉